

# C.K.ドージャーの祈り「天の父よ、これが現在の 状況であります…」— その日付と背景

瀬戸 毅義

『荒野に呼ばわる者—C.K.ドージャーの生涯』は、西南学院創立70周年記念として放映された特別番組である<sup>1</sup>。冒頭タイトルが現れる前の導入的部分に、創立者C.K.ドージャー（1879-1933）が祈るところがある。それは「天の父よ、これが現在の状況であります…」で始まっている。祈りの日付は1927（昭和2）年2月13日である。

本稿は学院史の中に度々引用されている、C.K.ドージャーの熱誠溢れるこの祈りが記された日記の日付と背後の状況を確認しようとするものである。

この祈りを最初に掲載するのは、C.K.ドージャーの逝去後一周年、1934（昭和9）年に西南学院より出版された『ドージャー院長の面影』<sup>2</sup>である。同書からこの祈りに関する記載をそのまま引用する（本書は縦書きである）。

一九二七年（昭和二年）二月十三日（この日の日記に記載しあった祈り）

……。天の父よ、これが現在の状況であります。あなたは私どもの心の願を知ろしめし給ふ。私どもが私共の一生を送るべき所として日本を選んだのは決して安逸を求め快樂を得んがためでは無かったのです。私どもはこの日本国民のために命を捧げるやう、あなたから御指図を受けたと感じたんです。日本国民は何よりも、かよりも、あなたが入用であります。……あなたの御手いかに短しとも、救い得ざる短かさに非ず。神よ、僕に、この際僕に要求し給ふところを示し給へ。若し西南にして、あなたの育成し給ふところのものならずば、われ等の眼速かに開いてこの校を閉鎖せしめ給へ。若しあなたの育成し給ふところならば、願はくば之に水灑ぎ給へ。私どもは断じて、あなたの喜び給はず、恵み給はざる事業に私どもの生涯を捧ぐることを欲しません。嗚呼、神よ、御子イエス、キリストに

1 西南学院の企画・著作。RKB 毎日放送の制作で76分番組。1986（昭和61）年12月24日（水）に放映された。今は故人である創立者を知る方々が多く登場する貴重な内容となっている。

2 故ドージャー院長記念事業出版委員会編『ドージャー院長の面影』（西南学院、1934）英語の原文は後半の部分 *A MEMOIR OF C. K. DOZIER* の4頁に記載。

よって啓示せられたるを拝し奉る通りに、あなたの御心をなさんことを望みます。

附記

最後の日記だけが順を踏んでゐないのは編輯者の故意にする所であります、此の日の祈りこそ故人の全貌 — 神の使命を感じ、その栄光を顕はさんが為に、その全身全霊を捧げて、西南の育成に、更に進んでは日本国民の為に敢然邁進する — を伺ひ知るものとして、特に抜き出したものであります<sup>3</sup>。

この祈りのもとの英文が本書の後半部分に掲載されている。そのまま引用する。  
Feb. 13, 1927 “God in heaven, this is the situation. Thou knowest our heart’s desire. We did not seek our own ease and comfort in choosing Japan as the place where we should spend our days. We felt directed of Thee to give our lives to this people. They need Thee above all else. …Thine arm is not shortened that Thou can’t not help. Show thy servant Thy will for him at this time. If Seinan Gakuin is not of Thy planting speedily open our eyes that we may close it. If it is of Thy planting, water it. We certainly do not desire to be putting our lives into an enterprise in which Thou art not interested and blessing. We want to do Thy will, O, God, as we see it revealed in Jesus Christ, Thy Son.”<sup>4</sup>

これは今も読む者の心を揺さぶる祈りである。学院史においても度々引用されるのもそのためであろう。『西南学院七十年史』（以下『七十年史』）に従って、この祈りの背景を見ることにする。『七十年史上巻』では以下のようになっている<sup>5</sup>。

高等学部の中の種々の出来事、日曜日問題、神学科長の辞任、神学科の自治問題、「水町事件」にともなう文商科長の辞表提出等々、C. K. ドージャーは院長として一日も心安まる時はなかった。

『SEINAN SPIRIT C. K. ドージャーの生涯』は、当時の状況を「孤立していくドージャー」との小見出をつけ、以下のように述べる。

---

3 同上、9-10頁。

4 同上、裏4頁。裏の44頁は、*A MEMOIR OF C. K. DOZIER* として英文の構成になっている。

5 『七十年史』（西南学院、1986）602-603頁。

1927（昭和2）年7月、インカレの野球試合に勝ち残った西南学院は、長崎高商との準決勝に臨むことになったが、試合は日曜日となった。…省略…ドージャーは試練の中で祈り、反省し、神のみ旨を求めたが、帰結するのは「キリストに忠実である」ということであり、他の回答を見出すことはできなかった<sup>6</sup>。

『神と人にと誠と愛を—E.B.ドージャー先生の生涯とその功績』にもこの祈りが引用されている<sup>7</sup>。

以上の三書で引用されるこの祈りの日付は、全て1927（昭和2）年2月13日である。それは上記の三書は、この祈りの日付を『ドージャー院長の面影』に由ったためであろう。その結果、祈りの背後状況を記述する際も1927年に合わせたのであろうと思われる。しかしこの日付が10年遡った1917年の2月17日であるとすれば、祈りの背後の状況もまったく異なるものとなる。西南学院の置かれた状況も違うのである。

戦後間もない1953（昭和28）年、創立者の妻 M.B.ドージャー（1881-1972）は、Broadman Press より一冊の書物を出版された。*CHARLES KELSEY DOZIER of Japan : A BUILDER OF SCHOOLS* という24頁の小著である<sup>8</sup>。同書に既述の祈りと同一のものが記載されている。しかし、その日付は、学院創立一年目の1917年2月13日である。以下はご夫人の記録と拙訳である。

His diary for February 13, 1917, contains the following prayer, written after a sleepless night :

“God in heaven, this is the situation. Thou knowest our heart’s desire. We did not seek our own ease and comfort in choosing Japan as the place where we should spend our days. We felt directed of thee to give our lives to this people. They need thee above all else. Thine arm is not shortened that thou can’t not help. Show thy servant thy will at this time. If Seinan Gakuin is not of thy planting, speedily open our eyes that we may close it. If it is of thy planting, water it. We certainly do not desire to be putting our lives into an enterprise in which thou art not interested and blessing. We want to do thy will, O God, as we see it revealed in Jesus Christ.”<sup>9</sup>

---

6 『SEINAN SPIRIT C.K.ドージャー夫妻の生涯』（西南学院、1996）49-50頁。

7 齊藤剛毅『神と人にと誠と愛を—E.B.ドージャー先生の生涯とその功績』（ヨルダン社、1986）30-31頁。

8 Maude Burke Dozier, *CHARLES KELSEY DOZIER of Japan : A BUILDER OF SCHOOLS* (Broadman Press, 1953).

1917年2月13日のドージャーの日記には、祈りの言葉が以下のように記されています。眠れない夜を過ごした後に書かれたものです。

天にまします神よ。これが今の状態です。あなたは私たちの心の願いをご存じです。私たちが日本を自分の一生を捧げる場所として選んだのは、自分の安楽や快適さを求めるためではありませんでした。私たちは、自分の生涯を日本人のために捧げよ、というあなた様からの導きを感じたのです。日本人は、とりわけあなたを必要としています。あなたの腕が短かすぎて、彼らを助ける事ができないということはありませ<sup>しもべ</sup>ん<sup>みこころ</sup><sup>10</sup>。どうかこの時、あなたのこの僕に、あなたの御意をお示し下さい。もし、西南学院が、あなたの植え付けたものでないなら、私たちがそれを閉校できるように、速やかに私たちの目を開いて下さい。あなたの植え付けたものであるなら、水を注いで下さい。私たちがあなたの御意<sup>みこころ</sup>でないことや、あなたが祝福なさっていない事業には、決して命を差し出したりしません。あー神よ、私たちは、イエス・キリストがお示し<sup>みこころ</sup>くださったように、あなたの御意を行いたいのです<sup>11</sup>。

『ドージャー院長の面影』に記された祈り（1927年2月13日の日記）と、M. B. ドージャーの *CHARLES KELSEY DOZIER of Japan: A BUILDER OF SCHOOLS* に記された祈り（1917年2月13日の日記）を対照していただきたい。双方は殆ど全く同一である。唯一の相違は『ドージャー院長の面影』には、“Thy Son”「汝の御子」が追加されているだけである。1927年と1917年の違いはあるものの、月日も同じ2月13日である。

このままを受け入れるならば、C. K. ドージャーは全く同じ祈りを正確に2回されたのである。日記の原文を目にしていない現在の時点で、私たちはこれをどのように説明したらよいのだろうか。本稿を書くきっかけは、実はこのことであった。

M. B. ドージャー夫人の著書に沿いながら、いま少し祈りの前後の状況を見ることにする。

西南学院という名がついたこの男子校は、福岡の中心部に杭を打ち下ろしました。最初の年が始まってすぐ、ドージャーは、2年目からはもっと規模を広げな

---

9 同上 p.18. M. B. ドージャー（瀬戸毅義訳）『日本の C. K. ドージャー—西南の創立者—』（津村愛文堂、2002）38頁。

10 「主の手が短くて救えないのではない」（イザヤ書59章1節）

11 M. B. ドージャー『日本の C. K. ドージャー—西南の創立者—』39頁。

ければならないことに気付きました。神は「あなたの天幕に場所を広く取れ<sup>12</sup>」とおっしゃっておられたのです。

新しい昼間学校の運営にくわえて、昼間と夜学校の講義、毎日昼と夜の2回のチャペルの責任、昼間および夜学校の会計の記帳は、ドージャー宣教師の日ごとの日課の一部でした。日曜には寮に住んでいる学生のために特別礼拝をしました。木曜の夜は、中学校の教授達といっしょに熱意をもって聖書の研究をしました。

1916年6月18日、條氏が院長を辞した時、ドージャーは、西南学院の院長となるよう依頼されました。ドージャーはすぐに伝道局に対し、学校の敷地拡張と次年度1917年の新入生のための教室を一つ建てるため、資金供給を願っていました。また、もっと宣教師を派遣して手伝って欲しいとも書きました。一番がっかりする返事が伝道局から返ってきました。それには、建物の拡張の「要望に沿うことはできない」と書いてあったのです。

この痛ましい知らせを聞いた時、ドージャーは、「アメリカの人々は、私たちが助けなければならない。さもなくば、私たちは日本政府との信頼を保つことはできないだろう。現在在学中の学生たちには卒業させることを約束している。私は神を信じている。しかし、クリスチャンは目を醒まさなければいけない」と言いました<sup>13</sup>。

関連の箇所を『七十年史』で確かめたい。1917年2月にC.K.ドージャーは、第2代院長に就任している<sup>14</sup>。開校2年目のこの年の入学志願者は74名、そのうち71名が入学を許可されているが実際に入学したのは66名であった。モード夫人の記録からも、誕生間もない西南学院の経営が大きな苦勞を伴うものであったことは、容易に推測できるのである。『七十年史』には、当時の状況が以下のように記されている。

かねてからの念願であった校地の購入、新校舎の建築、経営費の増大とともに、学院宗教教育の推進のために、ドージャー院長はじめ関係者は、日夜心を砕いた。ことに、世界大戦勃発等による米国経済界の不況のため、ミッション・ボードからの支援が思わしくない状況にあったため、ドージャー院長の悩みは大きかった。<sup>15</sup>

---

12 「あなたの天幕に場所を広く取り、あなたの住まいの幕を広げ、惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て。」(イザヤ書54章2節)

13 M.B.ドージャー『日本のC.K.ドージャー—西南の創立者—』37、39頁。

14 『七十年史上巻』282頁。

この文章は M. B. ドージャー夫人の以下の文章とも合致しているのである。

西南学院が、一年目を乗り切るという保証はなかったので、次の年の志願者はずっと少なくなっていました。手紙と電報がアメリカに送られました。電報でとどいた返事は、西南学院への600ドル<sup>16</sup>の援助でした。読者は、それは少なすぎるんじゃないか、と思われる事でしょう。確かに少なすぎる額でした。しかしこれにより、新しい希望が生まれました。600ドルと当初の土地の売却金を併せて、海沿いの土地を購入しました。神学校と体育館が建て直されました。そして、低価格の教室が建てられました。西南学院の永続的な場所に建物ができていくのを見て、人々の信頼も回復しました<sup>17</sup>。

1931（昭和6）年に、西南学院は創立15周年記念行事を挙行している。前院長として式典に招かれた C. K. ドージャーは、創立当初の苦境を語っている<sup>18</sup>。この貴重な証言は『七十年史』に記されていない。以下にその一部を引用する。下線は筆者による。

In February, 1917, after repeated attempts to secure a suitable Japanese Principal without success, I was elected Principal, which position I held until July 1929.

Principal Jo's resignation was a severe blow, but it was only one of many. After having had a full understanding with the Foreign Mission Board in Richmond that we should be forced to secure larger quarters in 1917, imagine the shock that came to me when I received a letter from Dr. T. F. Ray that the Board could not send us any money to buy land and erect buildings during that year. After reading this letter I was unable to sleep at nights. I spent much time in prayer. I remember well how I fell upon my knees in the Principal's office and poured out my soul in prayer to God to deliver us from the shame that would be ours in case Southern Baptists did not send us money.

---

15 同上288頁。

16 6000ドルの印刷ミスであろう。『七十年史上巻』289頁参照。

17 M. B. ドージャー『日本の C. K. ドージャー—西南の創立者—』39-41頁。モード夫人が記録したように、西南学院は1917年9月に、早良郡西新町に校地1万9800m<sup>2</sup>を購入し校舎の建築に着手している。『七十年史下巻』1358頁。

18 『七十年史上巻』364頁。

I not only prayed, but I wrote a letter to Dr. J. F. Ray, who was at home on furlough that year, telling him of our need and the desperate condition we were in. Fortunately, he received my letter shortly before the meeting of the Southern Baptist Convention at New Orleans, and so when he attended that Convention he presented our cause to the Convention and the laymen of the Convention promised to raise \$6,000.00 for us. With this money assured, our hearts were relieved, for with it in addition to what we should realize from the sale of the Daimyo Machi Property we would be able to buy new land and erect one new building. This was cabled to Treasurer J. H. Rowe on May 23rd by Dr. T. B. Ray.<sup>19</sup>

1917年2月、適切な日本人の校長を見つけるという試みが何度も失敗し、私が校長に選ばれ、1929年7月まで校長を勤めたのでございます。

條校長の辞任は深刻な打撃でありましたが、それは氷山のほんの一角でした。1917年、私たちとリッチモンドの外国伝道局との間で、西南学院にはさらに広い土地が必要であるということに関して、完全な合意が交わされていたのでございます。その後でT.B.レイ博士<sup>20</sup>がくださった手紙から、私が受けたショックを想像してください。手紙には、伝道局は西南に対し、年内に土地を購入し建物を建てる費用を送ることは一切できないとありました。手紙を読んだ後、眠れないことがいく夜もございました。私は長時間の祈りを捧げました。はっきりと覚えていますが、私は院長室で膝まずき、魂を注ぎ出して神に祈ったのでございます。どうぞ、南部バプテストがお金をくださらないなら、私たちを恥から救い出してくださいと。私は祈るだけでなく、J.F.レイ博士に手紙も書きました。彼はその年、休暇でアメリカにいらっしゃいました。私はその手紙の中で、支援の必要と私たちの絶望的な状況について書きました。幸いにも、レイ氏はニューオーリンズでの南部バプテスト連盟の集会の直前に、私からの手紙を受け取り、その集会で私たちの言い分を連盟に取次ぎ、連盟の信徒たちは6000ドルの支援を約束してくださいました。この送金が確実となり、私たちは胸をなで下ろしました。このお金と大名町の所有地の売却金を併せれば、新しい土地と新しい建物一棟を建てることのできるのです。この知らせは、5月23日に、T.B.レイ博士から会計

---

19 M.B. ドージャー『日本のC.K. ドージャー—西南の創立者—』60頁。

20 J.F. Ray (1872-1967) は宣教師として北九州、福岡、広島で働いた (宣教師在任 1904-1942)。

の J. H. ロウ<sup>21</sup>のところに電報でありました<sup>22</sup>。

このように1917年2月は、財政的に極めて窮迫していた。誕生間もない学院には、一年目を乗り切る保証はなかったのである“…there was no assurance that the school could continue beyond the first year…”<sup>23</sup>。状況はまさに、学院の将来が見えない危急存亡の時であったといえよう。

以上述べたように、前後の事情を判断すると、本来この祈りは1927年2月13日ではなく、1917年2月13日であったと思われるのである。F. C. パーカーもこの祈りの日付を1917年2月13日としている<sup>24</sup>。

なお、チャペルに対する厳格、日曜日の対外試合出場禁止の不满などから、西南学院高等部の学生が、C. K. ドージャー院長に自決勧告をしたことがあった。「我等は、貴下を、人格的に、院長として、また宗教家として仰ぐに耐えず、依て、自決を勧告す。」しかし、この出来事は1927年2月のことではなく、翌1928（昭和3）年の1月のことであった<sup>25</sup>。また C. K. ドージャーが日曜日の野球の決勝戦に学生の出場を禁じ、野球部員が激昂したのも、2月のことではなく7月のことであった<sup>26</sup>。

さて、私たちはここで別の大切な文書を参照しなければならない。それは M. B. ドージャー夫人の手になる未定稿 *SEINAN GAKUIN* である。これは『日本の C. K. ドージャー—西南の創立者—』とはまったく別の手稿である。85頁余りのタイプ原稿であるが、西南学院創立小史ともいうべき貴重な内容となっている。『七十年史』は、この手稿を「西南学院創立の前後」と名付けている<sup>27</sup>。F. C. パーカーの著書 *The Southern Baptist Mission in Japan, 1889-1989* では、これを“Seinan Gakuin”としている。（本稿では“Seinan Gakuin”とする）

私たちは“Seinan Gakuin”から、祈りに関する箇所を参照しなければならない。1917年の頁を見ると2月13日の日記がある。英文そのままを引用する。

---

21 John Hasford Rowe (1881-1967)。小倉で伝道し、後に西南女学院の創立者となった（宣教師在任1906-1929）。

22 M. B. ドージャー『日本の C. K. ドージャー—西南の創立者—』59-61頁。

23 同上38頁。

24 F. Calvin Parker, *The Southern Baptist Mission in Japan, 1889-1989* (University Press of America, 1991), p.87。

25 『七十年史上巻』603-604頁。

26 『SEINAN SPIRIT C. K. ドージャー夫妻の生涯』49頁。

27 『七十年史上巻』227頁。

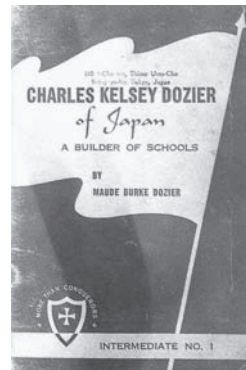


His diary for February 13, 1917, contains the following prayer, written after a sleepless night :

“God in heaven, this is the situation. Thou knowest our heart’s desire. We did not seek our own ease and comfort in choosing Japan as the place where we should spend our days. We felt directed of thee to give our lives to this people. They need thee above all else. Thine arm is not shortened that thou can’t not help. Show thy servant thy will at this time. If Seinan Gakuin is not of thy planting, speedily open our eyes that we may close it. If it is of thy planting, water it. We certainly do not desire to be putting our lives into an enterprise in which thou art not interested and blessing. We want to do thy will, O God, as we see it revealed in Jesus Christ.”<sup>28</sup>

一読すれば分かるように、この祈りは『日本のC.K. ドージャー - 西南の創立者-』のそれとまったく同一である。このようにM.B. ドージャー夫人は、ご自分の2冊の著書（一冊は未定稿）の中に、1917年2月13日の祈りについて言及している。ご夫君が日記に記したこの祈りがいかに忘れ難く、ご夫人の記憶に留められたかを示すものであろう。

それでは同手稿において、1927年のことはどのように言及されているのだろうか。以下は当時を回顧する夫人の言葉である。



Maude Burke Dozier, *CHARLES KELSEY DOZIER of Japan: A BUILDER OF SCHOOLS*

In February word comes from the Foreign Mission Board that the school must practise strictest economy during the year...The school conferred with the Mitsui Bank so as to withdraw the interest assured on the endowment Fund of ¥80,000. The interest was collected to use on the running expenses.

（2月に届いた外国伝道局からの言葉によると、学校（注：西南学院）は今年いっぱいギリギリに儉約しなければなりません...学校は三井銀行と協議して、預金してある基金8万円に確約された利子を引き出すことにしました。その利子は

28 M.B.Dozier, “Seinan Gakuin,” p.34.

当座の学校運営のために引き出されたのです。)

利子を引き出して、学校運営に回さねばならなかった。それほど厳しく追い詰められていたことが読み取れるのである。次のような言葉もある。

The financial strain that continued over a period of 10 years was disheartening to the principal. (10年以上にも互る金銭的重圧に、校長 [注：C. K. ドージャー] は落胆していました。)<sup>29</sup>

引き続いて1927年2月13日の日記が記録されている。ここに一つの疑問が生じるのである。1917年と同じ祈りが出てくることである。注意：1917年2月13日には書かれていない箇所は斜体字で示した。

On February 13, 1927 C.K.D. diary reads : “*This is a good day. Much thinking and meditation. My problem in insufficient funds to do what ought to be done in Seinan Gakuin, to educate children and take in the love an care of the family.* (今日は良い日であった。深く思考し深く瞑想した。西南学院において為すべきことを果たしたくても、愛をもって子供を教育し家族を配慮したくても、貧弱な財政のために出来ないこと。私の困難な事情はこれである。)

これらの記載は、C. K. ドージャー院長の憶い出を語る古澤正雄<sup>30</sup>の言葉とも合っている。

先生は実に身を持するに儉素であった。大抵の人であるならばモーニングを持たない者はない位置にありながら持たれなかった。私は一、二度先生に若しモーニングを作られたら先生の墮落であるといったことがある。其時先生は私の云ったことに深き共鳴を以て喜ばれたのであった。学院創立の年クリスマス、プレゼントに職員一同が蝙蝠傘と瓜の漬物を差上げた時に大へん喜ばれた、何ぜなれば其頃は破れ古した物を持って居られたからであった。又当時数年間は、夏を除いては春も秋も冬も山高帽を被り続けられた。それ程先生は儉素の人であった<sup>31</sup>。

---

29 同上 p.72.

30 古澤正雄は国語と修身を教えた。在任、1916-1934。

31 『ドージャー院長の面影』(西南学院、1934) 90頁。

ご夫人の手稿に戻りたい。

His diary of Feb.13 contains this prayer,

“God in heaven thou knowest our desire. We did not seek our own ease and comfort in choosing Japan as the place where we shall spend our days. We felt directed by Thee to give our lives to this people. They need Thee above all else. *We do not doubt Thee, but Thy servant failed Thee and us.*” (私たちはあなたを疑いません。あなたと私たちを失望させたのは、あなたの僕なのです。)

*“Our obligation is to the faculty students. We feel that God directed us in opening this school. It is not ours. While the results are small we believe God is working. When we hear the students thanking God for the ‘Aino Gakuen’ we feel that we are making lasting impressions.* (私たちには教員学生への責務があります。この学校の開設に当り神が我らを指図してくださった。私たちはそう考えます。学校は我らの所のものではありません。実りは貧しくとも、神が働き給うことを信じます。学生たちが「愛の学園」に感謝するのを聞く時、私たちは永続するものを残しつつあるのだと感じます。)

“Thine arm is not shortened that thou can’st not help. Show Thy servant Thy will *for him* at this time. If Seinan Gakuin is not of Thy planting speedily open our eyes that we may close it. If it is of Thy planting water it. We do not desire to be putting our lives into an enterprise in which Thou art not interested and blessing. We want to do Thy will, O God, as we see it revealed in Jesus Christ, *Thy Son* (汝の御子)”<sup>32</sup>

ここで1917年の祈りを1927年のそれと対照して見たい。斜体字の箇所は1917年2月13日では書かれていない文章である。注意すべきは、斜体字の文章を除けば、祈りはまったく同一なのである。しかし、次のような相違はある。1917年の祈りでは、冒頭の“God in heaven”の次に、“this is the situation”（これが現状です）と続くが、1927年の方では続いていない。1917年では *thy, thee* と小文字になっている。1927年では *Thy, Thee* と大文字である。このような些細な違いは、M. B. ドージャー夫人がご夫君の日記を“Seinan Gakuin”に載せる際に生じたものであろうか。

M. B. ドージャー夫人の手記は、いつでも優先されねばならない。C. K. ドージャー

---

32 M.B.Dozier, “Seinan Gakuin,” pp.72-73.

と労苦を共にされた、ご夫人が手ずから記されたものだからである。従って本来の日記本文を参照することが出来ない現時点では、それぞれの記載を真実なものとしなければならぬ。創立者のオリジナルな日記が、事柄の真相を明らかにするであろう。私たちは少なくとも、以下の三つのことを確かめることができたと思う。

- ①『ドージャー院長の面影』に記載された「天の父よ、これが現在の状勢であります…」の祈りは、1927年2月13日の日記から転載されたものであるが、その際斜体字で示した箇所が省かれている。
- ②創立間もない西南学院は、主に資金不足から閉校の危機に瀕したことが一度ならずあった。そのような時、C.K. ドージャーは、膝まずくほどに心を籠めて祈られた。それが「天の父よ、これが現在の状勢であります…」で始まる祈りであった。しかし、この祈りが最初に記されたのは、1917年2月13日の日記である。
- ③従ってこの祈りは、一度限りのことではなかったと思われる。学院が重大な危機に陥った時には、言葉は多少違っても、C.K. ドージャーは幾度もこの祈りをなされたのであろう。

私たちは、C.K. ドージャーの平坦ではなかった生涯とそのお働きを覚えて、感謝の念を懐くのである。西南学院は我らの所有<sup>もの</sup>ではなく、神が植え付けられたのだ。彼はこのことを固く信じていたのである。

#### 追補

先に Maude Burke Dozier, *CHARLES KELSEY DOZIER of Japan: A BUILDER OF SCHOOLS* (Broadman, 1953年) について触れた。偶々本書を手にとったのは、干隈にあった西南学院大学神学部のカルビン・パーカー (F. Calvin Parker) 先生の研究室においてである。後日『日本のC.K. ドージャー—西南の創立者—』と題して自費出版に至った。それは西南学院に奉職する一人として、幾分なりともC.K. ドージャーご夫妻のお働きに報いたいと思ったからであった。前院長L.K. シート先生は、本書の翻訳許可、校正その他全般にわたり労を取ってくださった。元院長・学長の田中輝雄先生は、訳語に関し多くのご指摘をくださった。その他にも多くの方々から教えていただいた。これらのことは全て感謝であった。後日、本書が正確を期して再度出版されれば、どんなにか喜ばしいことであろうか。C.K. ドージャーご令嬢のヘレン・ピーチ (Helen Pietsch) さんは、本書を喜ばれ、病床からお手紙をくださった。小生にとってこれは、ことのほか嬉しいことであった。尚同書のささやかな売上金は

ドージャー奨学金と中高新校舎のために捧げられた。

ヘレン・ピーチさんのお手紙には、いつも西南学院のために祈っていると書かれています。L.B.ハンキンス先生は、その小さな手書きの手紙をタイプして下さった。今は天に在るヘレン・ピーチさんも、手紙をここに載せることを許して下さると思う。

Aug. 1, 2002

Dear Setsu Senae,

I received your kind note and 2 copies of books about my father that you translated, this noon and I have read them just now. I surely appreciate your kindness and had not seen them before. Thank you, thank you. There are others who want to read them too. I will lend them to others and wait their returns.

Please excuse the messy writing but I am 92 years old and cannot do anything by myself but thank the Lord for all He does and many others who help me. I didn't expect to live this long but the Lord has now twice to do and I want to do faithfully this and do what I can for Him until He calls me.

My husband was so faithful to His past. He went to school the year after I fell <sup>ill</sup> and didn't expect to be alive. And last summer I was in the hospital all summer not expecting to be alive.

I still remember my days at Zionsville and pray for Zion and the many lost souls. We can't do enough for the Lord. We must be true to the Lord.

Thank you again for your kindness.

Sincerely,  
Helen D. Ogier Prentiss

ご令嬢ヘレン・ピーチさんの手紙

August 1, 2002

Dear Seto Sensei,

I received your kind note and 2 copies of books about my Father that you translated this noon and I have read them just now through. I surely appreciate your kindness and had not seen them before. Thank you, Thank you. There are others who want to read them too. I will lend them to others but want them returned.

Please excuse the messy writing but I am 92 years old and can not do some things by myself but thank the Lord for all His blessings and many others who help me. I didn't expect to live this long but the Lord has more work for me to do and I want to be faithful to Him and do what I can for Him until He calls me. My husband was so faithful to the last. He went to glory in 1992 the year after I fell and broke my neck and did not expect to be alive. And last summer I was in the hospital all summer not expecting to be alive.

I still remember my days at Fukuoka and pray for Seinan and the many lost souls. We can't do enough for the Lord. We must be true to the Lord.

Thank you again for your kindness. Sincerely,

Helen Dozier Pietsch

瀬戸先生様

2002年8月1日

今日の昼に、あなたの訳した私の父に関する書物2冊と親切なメモを受け取りました。今し方読み終えたところです。ご親切に感謝しています。翻訳されたこの本は存じませんでした。ありがとうございます。ありがとうございます。この本を読みたい方が他にもいますので、お貸ししたいのですが、返却してくださることを願っています。

乱雑な手紙をご勘弁ください。私は92歳です。自分でままにならない事が幾らもあります。しかし主と主から頂く凡ての祝福に感謝しています。私を助けて下さる方々に感謝しています。私はこれほど長生きしようとは思いませんでした。しかし、主は為すべき仕事をくださいました。私は、主に忠実でありたいのです。また主の召しがあるまで、主のために為すべきことをしたいと願っています。私の夫は最後まで忠実でした。私が転倒したために首を損傷し、生死が危ぶまれるようになった後の1992年に夫は天に召されました。去年の夏は、もう長くないのではないかと危ぶまれつつずっと入院していました。

福岡で過ごした日々のことを、今も忘れません。西南と救われていない多くの人たちのために祈りをささげます。私たちは、主の為に十分にはできませんが、主に忠実でなければなりません。あなたの親切にもう一度お礼を申し上げます。

真心をこめて、ヘレン・ドージャー・ピーチ